

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	小鳩ナーサリースクールー之江・分園
施設所在地	東京都江戸川区一之江7丁目7-41-15 ドエル・グリュック1階

1. 活動のテーマ

<テーマ>

ころがる

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

子どもたちの“知りたい、もっとやってみたい”という気持ちを大切にしながら、いろいろな素材や形、傾きと出会い、「ころがる」を楽しめる環境を整える中で、子どもの気付きや発見を深めていきたいと考えた。また、子どもたちの学びや発見、遊びの様子を観察し、職員間で語り合いながら成長に応じて環境を構成することで、子どもたちのさらなる好奇心や探求心を育み、保育の充実を図りたいと考え、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

7月 傾斜や素材を用意し、「ころがす」遊びを日常の中に取り入れる。さまざまな素材を転がしながら動きの違いを試す。
8月 傾斜の角度や転がす場所を変えながら、動きや行き先の変化を確かめる。コースを工夫し、繰り返し試せるようにする。
9月 行き止まりや分かれ道を作り、転がる方向や到達点を意識できるよう環境を広げる。
10月 素材の違い(重さ・形)による転がり方の違いを試す。複数のコースを行き来できるようにする。
11月 板や積み木を使って道筋を作り、自分たちで転がる環境を構成できるようにする。
12月 これまでの環境を組み合わせ、子どもが選んで試せる構成とする。
1月 活動の振り返りを行い、継続的に取り組んだ内容を整理する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

日々の遊びの中で自然に「ころがる」動きに出会えるよう、保育室やテラスにボールや筒、空き箱、丸い積み木など、転がりやすい素材を常時用意した。子どもが自分で手に取って転がしたり、偶然に転がる様子を目で追ったりできるように、床面を広く使える環境を整えた。

必要に応じて板や台を使ってゆるやかな傾斜を設け、転がる速さや方向の違いを試せる場も作った。子どもの興味に応じて素材や構成を入れ替えながら、継続して取り組めるようにした。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

室内やテラスに板や台を使ってゆるやかな傾斜を作り、ボールや筒、箱などさまざまな素材を用意して、「ころがす」遊びを日々の保育の中に取り入れた。子どもが自分で手に取り、実際に転がしながら動きの違いを試せるようにした。

2歳児は、転がる様子をじっと見たり、何度も同じ場所から転がしたりしながら、動くことそのものを楽しめるようにした。

3歳児には、どこまで行くかを確かめられるようコースを少し長くしたり、行き止まりや分かれ道を作ったりした。

4・5歳児には、板の角度を変えられるようにしたり、途中に積み木を置いたりして、自分たちで転がる道を考えられるよう環境を工夫した。

素材や傾斜を変えることで動きが変わることを、繰り返し試せるようにしながら、年齢に応じた取り組みへと広げていった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・2歳児は、転がる様子をじっと目で追いながら何度も同じ場所から転がしていた。止まると再び手に取り、繰り返し試す姿があった。

3歳児は「こっちに行ったよ」「もう一回やってみよう」と友達と声をかけ合いながら転がす姿が見られた。行き止まりで止まると、場所を変えて試す様子もあった。

4・5歳児は、板の角度を変えたり、途中に積み木を置いたりしながら「速くなった」「ここで止まったね」などと結果を確かめていた。転がる前に「こっちに行くと思う」と予想する姿もあった。

保育者はすぐに答えを伝えるのではなく、「どうなるかな」「もう一回やってみる？」と問いかけながら、一緒に確かめる関わりを行った。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

繰り返し試せる環境を整えることで、年齢に応じた気づきや工夫が自然に生まれることを改めて感じた。2歳児は動きそのものを楽しみ、3歳児は結果を伝え合い、4・5歳児は予想や工夫を加えながら試しており、同じ「ころがる」活動でも着目する点が異なることが分かった。

また、保育者がすぐに答えを示さず、一緒に確かめる姿勢で関わることで、子ども自身が考え、試す時間が深まることに気づいた。環境のわずかな違いが遊びの広がりにも影響することも実感した。

今後も日常の遊びの中で試す経験を重ねられるよう、素材や構成を見直しながら継続して取り組んでいきたい。